

令和 2 年 5 月 31 日現在

機関番号：32617

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K13393

研究課題名（和文）宮崎夢柳作品における女性表象と「自由」の概念との関連性についての研究

研究課題名（英文）A Study on the Linkage Between the Female Representation and "Liberty" in Miyazaki Muryu's Writings

研究代表者

倉田 容子（Kurata, Yoko）

駒澤大学・文学部・准教授

研究者番号：80618843

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,200,000 円

研究成果の概要（和文）：本研究は、明治期政治小説の代表的な書き手である宮崎夢柳の小説を主な研究対象とし、女性表象の変遷と特質、および、「自由」の概念との関連性について検討するものである。夢柳の作品における女性表象を整理した上で、それらの表象と同時代の自由民権運動や女権論との関連性について考察し、女性表象が、民権家の「志士」としての規範との葛藤を引き起こす「自由」の概念を物語世界に導入する役割を果たしつつ、同時に、女性の政治的課題を私化する側面を持つことを明らかにした。また、夢柳を出発点として女性活動家・思想家についても調査を進め、ジェンダーを視座として自由民権運動から社会主義への文脈を辿る構想を得た。

研究成果の学術的意義や社会的意義

ジェンダー表象は政治小説の骨子を形成する要素であるにも関わらず、従来の政治小説研究においては体系的な研究はなされてこなかった。本研究により、政治小説が主眼とした「自由」の概念と、近代黎明期におけるジェンダー規範との関連性が明らかになった。また、これまで日本近代文学領域におけるジェンダー研究では、国民国家における良妻賢母規範や家族制度の問題に議論が集中する傾向があった。本研究では近代国民国家の成立以前に遡ることで、ジェンダー研究における従来の問題機制を相対化した。

研究成果の概要（英文）：In this research, I examined the female representation in Miyazaki Muryu's writings, considering its history, distinction, and connection with the idea of liberty. After illustrating the history of his female characters, I examined the linkage between them and the philosophy of the same period, such as freedom, democracy, and women's rights advocated in the first wave of feminism. Following these examinations, I clarified that although female characters played an important role in introducing the idea of liberty, which caused a moral conflict among the activists of Jiyu Minken Undo (Movement for Liberty and People's Rights) as the patriots, they also had a role in excluding women's political issues from the stories as these were apparently "personal matters." Subsequently, I also investigated female theorists and activists, and illustrated the social context from Jiyu Minken Undo to Socialism during the Meiji Period from a gender perspective.

研究分野：日本文学

キーワード：日本文学 自由民権運動 ジェンダー 宮崎夢柳 政治小説

## 1. 研究開始当初の背景

政治小説においては「佳人」(美貌の女性)を「自由」の隠喩とする表現手法が常套的に用いられており、ジェンダー表象は、政治小説がその喧伝を主要な目的とした「自由」の概念と不可分な、政治小説の骨子を形成する要素と言える。にもかかわらず、従来の政治小説研究においては、作家の政治的態度や種本・典拠に関する研究は多くの蓄積があるものの、ジェンダー表象に関する研究は極めて手薄であった。政治小説の代表的な書き手の一人である宮崎夢柳も女性を「自由」の隠喩とする表現手法を好んで用いたが、夢柳研究においてもジェンダー表象への言及は少なく、その全貌も表現の生成過程も明らかになっていなかった。

このことを踏まえて、本研究では、夢柳作品の女性表象の変遷と特質を明らかにし、女性表象と政治思想がどのようにに関連しているのか、その具体相を明らかにすることを試みた。夢柳作品に特徴的なのは、虚無党の「佳人」が、刑死や、警吏憲兵との格闘の末の斃死など、悲惨な末路を迎えることである。夢柳作品を特徴づける「鬼」や「髑髏」の表象も、とくに後期作品においては「佳人」と関連付けられている。従来、こうした女性表象の残酷さについては、江戸戯作の怪談的要素や、杜甫や岑参、杜牧ら唐代を中心とする漢詩の伝統(山本芳明「漢詩文と政治小説

宮崎夢柳の場合」『國語と國文學』第59巻第1号、1982)など、前近代的要素に基づくものと目されてきた。だが一方で夢柳の文学史的特徴が近代国家における「対等な男女の革命志士」(西田谷洋「虚無党実伝記 鬼啾啾」論 召喚・寓意・誘惑」『國語と國文學』第75巻第2号、1998)を描いたことにある以上、女性表象も作中の自由民権思想と有機的に結びついている可能性がある。また、典拠とされる杜甫や岑参の詩においては出征兵士(男性)の死を意味していた「鬼」や「髑髏」の表象が、夢柳作品においては女性性へ転じていることも、単なるノイズと見なすのではなく、政治小説におけるジェンダー構造の問題として検討する必要があると考えた。

政治小説研究をジェンダーの視座から修正すると同時に、本研究では、日本近代文学領域におけるジェンダー研究を更新することを目指した。これまで日本近代文学領域におけるジェンダー研究は、国民国家における良妻賢母規範や家族制度の問題に議論が集中する傾向があった。むしろそれは近代的性役割を相対化する視座を有するものだが、一方でこのことは逆説的に、それらの規範や制度を堅牢な檻として固定化し、自明視する傾向を齎していたと言えるのではないか。政治小説を通して近代国民国家成立以前の女性表象を検討するが、こうした従来のジェンダー研究における問題機制を相対化する契機となると考えた。

## 2. 研究の目的

本研究は、夢柳作品の女性表象に焦点を当て、その特質と変遷を明らかにするとともに、同時代の自由民権運動や女権論との関連性を明らかにすることを目的とする。自由民権運動は、女性が政治の場から完全に排除される直前の、女性に政治参加が許された一時期と位置づけられる場合もある。だが、女性を「自由」の隠喩とする政治小説の女性表象は、近代国家における公/私の区分とジェンダー編成に対して、どのような意味を持ち得るのか。夢柳の表現の特質の検討にとどまらず、近代女性表象史における夢柳の女性表象の功罪について検討し、日本近代文学における政治とジェンダーの関係を問い直すことを、最終的な目的とした。

## 3. 研究の方法

- (1) 夢柳の全小説における女性表象を整理し、修辞やプロットの変化の他、性差をめぐる規範意識の質的变化を調査する。
- (2) (1)の調査結果と、各小説の種本やプレテクストを比較検討し、夢柳作品の独自性と引用との関係を明らかにする。具体的には、作中に引用された勤王志士の漢詩文や、『鬼啾啾』の典拠として知られる Stepanyak の *Underground Russia: Revolutionary Profiles and Sketches From Life* (London: Smith, New York: Charles Scribner's Sons, 1883) をはじめとする革命文学等を参照し、異同を明らかにする。
- (3) (2)で明らかにした女性像の独自性と、夢柳の小説が連載された諸新聞(『高知新聞』、『土陽新聞』、『自由新聞』、『絵入自由新聞』、『自由燈』、『東雲新聞』など)に掲載された記事や、中江兆民らの議論等を対照し、同時代の自由民権論や女権論との関連性を検討する。
- (4) 景山英子、平林たい子など、女性活動家・思想家について調査し、夢柳以後の政治とジェンダーをめぐる文学史的展開について検討する。

## 4. 研究成果

初年度は、夢柳の女性表象の変遷の整理とその特質の把握、および、自由民権運動と夢柳の関わり方の理解につとめた。具体的な内容は、以下のとおりである。

まず、夢柳の女性表象の特質(漢文脈と近代的な「自由」の観念の混淆、残酷性など)がとくに色濃く表れた作品として「芒の一と叢」(『東雲新聞』1888)を取り上げ、女性表象が果たす役

割を中心として分析を行った。その成果は、雑誌論文「宮崎夢柳『芒の一と叢』における女性表象」(『文学・語学』第220号、2017)に発表した。「芒の一と叢」は、パリに渡って「共産党社会党虚無党などの仲間」となる女性・児島文子を主人公としているが、文子は警吏憲兵の刃に倒れた後、息子秀の手によって髑髏を掘り返され、「自由平等」の通義発揚のため衆目に晒される。こうした女性表象の必然性を明らかにするため、引用されたプレテクストと、その改変について検討した。まず、登場人物の造形において幕末勤王志士の文学が引用され、文天祥「正気之歌」を中核とする志士のエートスが織り込まれていることを明らかにした。こうした引用は、小説の書き手である夢柳や主要な読者たちを明治維新の正統な後継者として再定位するパフォーマンスであると思われるが、「芒の一と叢」においては勤王志士を支えた「貞女」「孝女」の存在が排除され、「人民の自由権利」に命を賭す新たな女性像が示されている。この女性像には、皇恩と忠の互酬関係から疎外された「婦人女子」という属性が、尊王攘夷から「自由権利」への価値転換の梃子として用いられているのを見ることができる。だがその一方で、文子を通して物語に導入された「自由権利」の概念は、最終的には秀が「自由」の隠喩としての文子の髑髏を所有することにより、夢柳および読者の手に奪還される。このように、女性登場人物は物語に「自由」の概念を齎すために必要とされるが、その役目を終えた後は苛烈な死とともに物語から放逐されることを論じた。

女性表象について検討を進める同時に、夢柳が身を置いた土佐自由民権運動についての資料調査を行い、夢柳のテキストと自由民権運動の距離について研究史の見直しを行った。その成果は、雑誌論文「土佐を歩く夢柳——初期テキストと土佐自由民権運動の距離」(『駒澤國文』第55号、2018)に発表した。まず、高知市立自由民権記念館および高知県立図書館にて土佐自由民権運動に関する資料を渉猟した結果、これまで戯作的な習作と目されてきた夢柳の初期作品にも、土佐自由民権運動の文脈が刻印されていることが明らかになった。「春色双樹の花」(『高知新聞』1881)に登場する広栄芝居や「近水の台月の面影」(『高知新聞』1881)に登場する陽暉楼は、政談演説会や懇親会がしばしば開催されたことで知られる芝居小屋・妓楼であり、巡遊記「芸都紀遊」(『高知新聞』『土陽新聞』1881)も、土佐自由民権運動が高知市およびその周辺から郡部へと拡大していく前夜の熱気を捉えたものであるとともに、この記事それ自体が運動の隆盛に寄与する側面を持っていたことが明らかになった。

初年度の高知市立自由民権記念館等での調査により、これまで考えられていた以上に夢柳の創作が時事的な文脈と密接なかかわりを持っていることが明らかになった。そのため、二年目はこれを踏まえて研究計画を修正し、以下の調査・検討を行った。

まず、初年度に行った夢柳の女性表象の変遷に関する調査に基づき、女性表象と同時代の思想的文脈(とくに法的言説、自由民権論、女権論)との連関性について検討を行った。その成果は、雑誌論文「鬼啾啾」における「主義」と「私事」(『駒澤國文』第56号、2019)に発表した。ここではとくに「鬼啾啾」(『自由燈』1884-1885)を取り上げ、まず、近接した時期に発表された「高峯の荒鷲」(『絵入自由新聞』1883)や「冤枉の鞭笞」(『絵入自由新聞』1882)における女性像との差異を、公私の境界の揺らぎという観点から検討した。その上で、同時代の思想、ここではとくに法的言説や自由民権論、女権論との関わりについて検討した。この作業を通じて、近代初頭における公的領域/私的領域の複数的な再編と「自由」な政治的主体の形成、そして公的領域から女性の「自由」をめぐる課題が排除される過程を辿りつつ、それらの動向と夢柳の女性表象との関わりについて考察を行った。

また、夢柳以後の女性像と「自由」の概念のその後の展開について検討するため、景山(福田)英子をめぐる同時代の言説および英子自身の思想について調査・検討を開始するとともに、社会主義の系譜とその文学作品におけるジェンダーの問題について調査を開始した。日本文学領域における「差異の政治」の歴史と問題点を検討した雑誌論文「断片化に抗う——『ナチュラル・ウーマン』受容史とクィア・リーディングの行方」(『昭和文学研究』第77号、2018)も、女性表象と「自由」の概念に関するものであり、本課題に関連する業績である。

最終年度は、これまで考察から漏れていた恐怖の表現とイデオロギーの関係性について検討するとともに、前年度から調査を継続していた景山(福田)英子、および、平林たい子について調査・検討を進め、成果の一部を発表した。具体的な内容は、以下のとおりである。

「鬼啾啾」(『自由燈』1884)を中心的に取り上げ、夢柳の小説における恐怖の表現とイデオロギー、そして女性表象の結びつきについて、恐怖の表現史の観点から考察した。その成果は、口頭発表「政治・怪談・女——『鬼啾啾』の虚無党表象を中心として」(日本近代文学会6月例会・特集「亡霊の近代」、於・実践女子大学、2019)で報告し、今後、論文として刊行を予定している。「1. 研究開始当初の背景」にも記したとおり、夢柳の恐怖の表現は江戸戯作の怪談的要素を取り入れたものと目されており、そこに「江戸以来の内発的近代への指向」(飛鳥井雅道「民権文学の先見性——過去の文学の再構築の問題」『日本文学』第33巻第11号、1984)を見出す見方もある。だが、巡遊記などに見られる夢柳の「愚民大衆観」や、そもそも怪談が宗教的指導者層により普及した死生観・靈魂観と不可分であることを踏まえれば(堤邦彦『江戸の怪異譚——地下水脈の系譜』ペリかん社、2004)、そこに民衆文化への期待を読み取ることは無理がある。ここでは、夢柳の小説がイデオロギーを含む種々の秩序の揺らぎを内包していることを明らか

にした上で、思想的に不安定な「虚無党」の像が、グロテスクな監獄表象や飢饉の地獄絵図、狡猾に暗殺を実行し、最終的には自らも死体と化す女性像といった「おぞましきもの」の表象によって形作られていることを検証した。

また、女性を「自由」の隠喩として見るまなざしが現実の女性に対して向けられたケースとして、大阪事件の「紅一点」として知られる景山（福田）英子を取り上げ、女性活動家・思想家が置かれた状況の困難を浮かび上がらせるとともに、英子がそうした状況にどのように抗い、何を語ったのかを検討した。その成果は、雑誌論文「福田英子の「戦ひ」—— 私 から 公 へ」（『駒澤國文』第 57 号、2020）に発表した。英子は大阪事件当時、「魯西亜の烈女ソヒヤ、ペロースキの風あり」（宮崎夢柳『大阪事件志士列伝 中』1887）と評されたが、夢柳の小説の女性たちが「自由」の使者としての役目を果たした後は物語から放逐されたように、英子もまた大阪事件の後は出産や性的スキャンダルにより自由党の「同志」の連帯から外れ、やがて社会主義の立場から「民党」を批判する側となる。ここでは、英子についての諸言説を整理した上で、『妾の半生涯』（東京堂、1904）および英子が主催した社会主義婦人雑誌『世界婦人』に掲載された論説や雑記を明治社会主義の文脈において捉え直しつつ、私 語りの戦略性について考察した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 2件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 倉田容子	4. 巻 第57号
2. 論文標題 福田英子の「戦ひ」 私 から 公 へ	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 駒澤國文	6. 最初と最後の頁 95-119
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 倉田容子	4. 巻 第77集
2. 論文標題 断片化に抗う 『ナチュラル・ウーマン』受容史とクィア・リーディングの行方	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 昭和文学研究	6. 最初と最後の頁 57-70
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 倉田容子	4. 巻 第56号
2. 論文標題 「鬼啾啾」における「主義」と「私事」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 駒澤國文	6. 最初と最後の頁 29-56
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 倉田容子	4. 巻 第220号
2. 論文標題 宮崎夢柳『芒の一と叢』における女性表象	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 文学・語学	6. 最初と最後の頁 1-13
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1．著者名 倉田容子	4．巻 第55号
2．論文標題 土佐を歩く夢柳 初期テキストと土佐自由民権運動の距離	5．発行年 2018年
3．雑誌名 駒澤國文	6．最初と最後の頁 31-56
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件／うち国際学会 0件）

1．発表者名 倉田容子
2．発表標題 政治・怪談・女 『鬼啾啾』の虚無党表象を中心として
3．学会等名 日本近代文学会6月例会・特集「亡霊の近代」
4．発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
--	---------------------------	-----------------------	----